

第一回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

大久保 喬樹 著『岡倉天心 驚異的な光に満ちた空虚』

(1987年12月20日 小沢書店 刊)

大久保 喬樹 おおくぼ たかき 昭和21年(1946)生まれ。横浜で育つ。専攻は、近代日本文学・比較文学。東京大学教養学部フランス科卒業。同大学大学院比較文学修士課程中退。フランス政府給費留学生としてパリ大学、高等師範学校に留学。東京女子大学文理学部助教授(受賞時)。現在は東京女子大学現代教養学部教授。著書には、『パリの静かな時』、『見出された「日本」』、『日本文化論の系譜』、他がある。

受賞のこぼ

この五月モントリオールからバンクーバーに向かう三泊四日の汽車の旅で、車窓のカナダの風景を眺めながら和辻哲郎の『風土』を読んでいましたが、和辻の日本文化研究の特徴として、日本を見る際に、常に外から広い視野でとらえたこと、それから自然と人間との関わりを大切にしたことと二点があると痛感いたしました。それらは岡倉天心の特徴でもあるわけですし、和辻と岡倉はちょうど一世代違いますが、この二人の間に共通するものがあると思えました。今回、この賞をいただくことになりました<sup>えにし</sup>縁を感じながら、これから岡倉と和辻、姫路の近隣に生まれた柳田國男などの日本文化研究を総合的に考える仕事に取り組みたいと思います。

※授賞式の挨拶から構成。

《選考委員評》

司馬 遼太郎

物を考えるというのは、地を掘って地殻のしんまでつきとおさないと、かえって危険になる。つきとおすというよき伝統が、播州人にある。『和辻哲郎文化賞』の第一回だから、こんな感想からはじめたい。

ついでながら、私のよき播州人という範疇は、江戸期の山片蟠桃<sup>やまがたぼんとう</sup>(高砂出身)や、慶応二年うまれの井上通泰(神東郡出身)、明治八年うまれの柳田國男(同)、同二二年うまれの三木露風(竜野出身)、同三〇年うまれの三木清(揖保郡出身)あるいは同四四年うまれの椎名麟三(飾磨郡出身)などを思ったりすることで、できあがっている。むろん、同二二年に姫路の仁豊野にうまれた和辻哲郎が入っていることはいうまでもない。

中途半端に考えると危険だというのは、山片蟠桃をみてもよくわかる。かれは大坂に出て丁稚から番頭までつとめ、主家のたてなおしに成功しつつも、生涯、恭謙な一番頭でおわった。働きながら学問を学び、晩年『夢の代』<sup>しる</sup>において、地殻をつらぬくほどの痛烈さで無神論を展開し、しかも自分に対しては初期新教徒のように厳格だった。物を考えてしかも独創的であるというのは、江戸初期以来、播州が農村の質朴をのこしつつ、才気を重んずる都市風商品経済にほどよく洗われていたことと無縁ではあるまい。しかも、播州は早くから学問が農村に滲透していた。

物を考える上で、先人の説を知らずに手前勝手に頭だけをつつこんでいるのはきわめて危険だという意味のことが『論語』にもある。播州の風土には、幸いそういう<sup>やろうじだい</sup>夜郎自大というものがない。そんなことを考えつつ第一回受賞作に、大久保喬樹氏の『岡倉天心』を得たのは、姫路市にとって、大きな幸運だったし、この賞の<sup>さいきき</sup>幸先にとってもすばらしいことだった。全国の読書人とともにこのことをよろこびたい。

文学の芳香

陳 舜臣

異能の人であり、奇矯の人でもあった岡倉天心は、なんどもくり返して論じられなければ

ならない。このふしぎな発光体は、まことにとらえにくい。しかし、日本がはじめて西欧と、「美」の面で接触したときの重要な立会人として、彼の全体像の解明は、私たちには避けて通れないテーマである。大久保喬樹氏が、真正面から天心像に取組んだことに、まず敬意を表したい。

大久保氏の『岡倉天心』は、これまでの天心論から抜きん出ているとおもう。なによりも、屈折率の異なるさまざまな光に、それぞれ周到に、冷徹ではあるが、心やさしさを失わない目を配っているのがうれしい。

ヨーロッパへの視野について、天心がはじめから、伊藤博文や森鷗外のような明治のリーダーたちのそれよりも、広く長い視野をもっていたという指摘は貴重である。さらにヨーロッパ世界と前近代的、自然的世界を同一のレベルで結んで眺めわたすような視野にまで、天心がおしひろげた経過を、大久保氏の筆はていねいに追う。少年客気の時代の漢詩から、晩年期におけるバネルジー夫人への恋文にいたるまで、天心の心のうごきを、読者に克明に伝えてくれる。克明にはあるが、けっしてわずらわしさをかんじさせない。氏の明晰な論理の才能と、ゆたかな文学的資質によるものであろう。

和辻哲郎を記念するために、新しくつくられた本賞は、ぜひとも文学的香気を帯びた作品に、というのが私たち選考委員の共通の願いであった。かつて谷崎潤一郎と文学の僚友であった和辻哲郎は、学者の道にはいつてからも、その文章に文学的な香気を漂わせていたからである。

第一回和辻哲郎文化賞に、最もふさわしい作者、最もふさわしい作品を得て、ほんとうによかったとおもう。大久保氏がこれを機に、さらに飛躍することを期待したい。

#### 梅原 猛

今回の第一回和辻哲郎文化賞（一般部門）の候補作品として、大久保喬樹氏の『岡倉天心』を見出したことは私の喜びであった。私は寡聞にして、それまで大久保喬樹氏の本も論文も読んだことはなく、その名も知らなかった。しかし、この書を一読するに及んで、私はそこに豊かな教養と独自の批評眼を持ち、流麗な文章で、この謎の思想家、岡倉天心を見事に解析してみせる作家を発見し、そこに驚きさえ覚えたのである。

岡倉天心は、私にとって巨大な謎であった。その変幻自在な行動の軌跡、そして何よりもその主な著作を母国語ではなく英語で書き、その晩年の魂のもっとも深い秘密を漏らすバネルジー夫人への手紙をも英語で書くという、このアジア主義者、岡倉天心のパラドックスをどう解いてよいか分らなかった。天心はわざと自分を巨大な疑問符として後世に残したかに見える。この巨大なる疑問符である天心の謎を、大久保喬樹氏は、天心の行動と著作に対する実に精密な考察によって解き明かしてくれる。

この伝記の中心は、官僚として、あるいは国士としてさまざまな行動をした天心が、その外的世界から脱落し、あるいは離脱し、虚無と光に満ちた永遠なる内的世界に入っていく過程の叙述であろう。特に『茶の本』及び上演されなかったオペラ台本「白狐」の解釈はすぐれている。そしてその終局には五浦及び赤倉の自然がある。五浦及び赤倉を訪れたときの著者の感激が冒頭と終りにあるが、それは著者が天心と一体になり、そして天心とともに「驚異的な光に満ちた空虚」の中へ融合してしまう体験に裏付けられているのである。

今回の選考において司馬氏、陳氏、全く私と同意見であり、甚だ後味の良い選考となった。第一回和辻哲郎文化賞が、このような才能ある新人に満場一致で授与されることになったのは、和辻哲郎文化賞のためにも誠に喜ばしいことであろう。